

Title	スイス建国700年記念祝祭劇：ヘルベルト・マイヤーの『ミーテン劇』について
Sub Title	Das offizielle Schauspiel zur 700-Jahrfeier der Schweiz : Herbert Meiers „MYTHENSPIEL"
Author	宮下, 啓三(Miyashita, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.150(295)- 161(286)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0161</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# スイス建国700年記念祝祭劇

ヘルベルト・マイヤーの『ミーテン劇』について

宮 下 啓 三

## 1. 建国記念行事の中の祝祭劇

1991年に建国700年目を迎えてスイスではさまざまな記念行事がおこなわれた。1月10日から11月17日までに設定された行事期間に連邦(=国)主催の全国的規模の行事、カントン(=州)単位の祝祭、コミューン(=市町村)ごとの催しが多彩に相次いだ。

記念行事は8月1日の建国記念日にそのピークに達した。フィーアヴァルトシュテッテ湖の西岸にあるリュトリ草原で3つの地域の代表者たちが会合して協力を誓う文書に署名した日、つまり1291年8月1日が、スイス連邦の歴史の出発点とされている。700年後のこの日にリュトリ草原で建国記念式典が催された。

記念行事の基本的なコンセプトとされたのは、4つの国語を持つ多言語国家であるスイスの国内の文化交流を主眼とする「4つの文化の祝祭」と、ヨーロッパの中央に位置して周辺諸国との友好を記念しつつ強化することを主眼とする「連帯の祝祭」の2つだった。この発想にもとづいて音楽、文学、演劇、美術、科学などの文化的な領域での催しが企画された。そして、8月1日の式典を中心にして「誓約連盟の祭典」が配置された。「誓約連盟」というのは「スイス」の同義語だが、近代化されて「連邦」となる以前のスイスの呼称でもある。

「誓約連盟の祭典」のハイライトが建国記念日の昼のリュトリ草原での式典と、その夜に建国の証明とされる文書の保存場所であるシュヴィーツでおこなわれた儀式だった。前者はヨーロッパ諸国から客人を迎えてスイスの国際的な立場を強調し、後者は古式ゆかしい衣装をまとった人々によ

るページェントによってスイスの国内の結束をことほぐものとして演出されていた。そればかりではなかった。2つの演劇が「誓約連盟の祭典」の範疇に属する行事となっていた。

アルトドルフの住人たちによる『テル劇』は、19世紀末に始まってすでに1世紀近くの歴史を誇っている。ドイツの劇作家シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』はスイス建国の精神をもっとも見事に表現する文学作品として今も変わらない尊敬と支持をスイス人たちから受けている。長い伝統として定着した『テル劇』が、建国700年の年にその価値を認められて、記念行事の柱のひとつとされたのだった。

もうひとつが「祝祭劇」と銘打たれて、記念の年を祝うために新しく作られた『ミーテン劇』である。スイス中央よりやや東寄り、アルプス山脈の北側の山岳地帯に位置しているシュヴィーツは、人口の少ない牧歌的なカントンの中心にある。その町自身が5千人ほどの人口を持つにすぎない。その小さな町の中心に近い草原に4500人収容の野外劇場が仮設された。大都市の大劇場ではなしに、劇場さえない小都市にわざわざ大きな施設を作って演劇による祝祭をおこなう。こういう発想はスイス以外では思いも寄らないことではあるまいか？

では、『ミーテン劇』とは、どのような内容の劇であったのだろうか？

シュヴィーツの町に東側からのしかかるように「大ミーテン」と「小ミーテン」と呼ばれる2つの峰を持つ岩山がある。野外劇場はこの2つの峰がシルエットとなって遠景に浮かぶように作られた。けれども題名は一義的ではない。原題名はMythenspielという。山の名前を知るスイス人なら即座に「ミーテンシュピール」と発音して、スイス建国の歴史にゆかりの土地を連想するだろう。そうでない人、つまり標準語のドイツ語を理解できてしかもスイスの事情に詳しくない人ならば、同じ綴りを「ミューテンシュピール」と発音する。「ミューテン」とは、「神話」という意味のドイツ語女性名詞の複数形である。

どちらが正しいかを詮索するまでもない。作者はミーテンの山を舞台背景にした神話劇を書こうとしたのだった。その作者については後の話題に

譲って、先に作品の粗筋を紹介しておくことにしよう。

## 2. 『ミーテン劇』の内容

野外劇という制約のため、固定されたセッティングはなく、幕さえない。その代わりに照明と音響を最大限に生かして自由に場面が転換される。全部で22のシーンから成っている。主人公はタイラーという名の平均的現代スイス人であって、交通事故で生死の境をさまよっているうちにスイスの伝説や歴史の世界を放浪する。

(1) 中年男のタイラーがミーテン山の麓の道を走行中に対向車のライトに目がくらんで車の運転を誤って事故を起こし、気を失う。(2) この劇の演出家であるフィンツがタイラーを起こす。2人の「頭のない人物」が徘徊している。フィンツは「山に入って、穴や洞を訪ね、岩塔に登り、埋もれているものたち、地に沈んだものたち、忘れられたものたちを出現させよう」と言う。スイス人の過去を探る「夜の旅」が始まる。それは車に同乗していて姿の見当たらない女性を捜すための旅でもある。(3～5) 始めに出会うのは「山道の猫」、「巨大な女」、「シャイベン犬」、そして「頭のない人物」など、ウーリ地方の古い伝説にあらわれるスイス山岳地帯の妖怪変化たち。人間の生活に役立つ資源に乏しく、むしろ恐怖心を起こさせる魔力にみちた、アルプスの原始の姿を象徴するものたち。(6) 岩の洞窟の中で「3人のテルたち」が眠っている。老年、壮年、青年の3世代のテルたちは、スイス中央部の3つの地域を代表する人物たちでもある。彼らの語る言葉を文字に書きあらわす役目をタイラーが負う。その言葉とは、どうやら「リュトリ草原の誓い」の文句であるらしい。(7) スイス兵たちが旗を押し立て、軍楽の音とともに出征して行くが、やがて、たくさんの矢を体に受けて死んだ仲間の死骸を背負って、悄然と戻って来る。3人のテルたちが彼らを迎える。これは1515年に北イタリアのマリニャーノでの合戦にスイス人の軍隊が手痛い敗北を喫したことをあらわす。この時以来スイスは武力による拡張をいっさい断念する国となった。(8) 山の中の明るく照らされた広間。都市の貴族とその娘オイゲーニア、枢機卿と

説教師が登場する。ルネサンス時代における都市の発展と宗教改革時代の新旧両宗派の対立が暗示される。タイラーは美しいオイゲーニアに愛情を告白する。だが、彼女の衣服の下から真っ黒な体があらわれる。黒死病だ。(9) タイラーは医師パラケルズスを訪ねる。パラケルズスは死と再生について語る。その神秘的な生命観はタイラーにはよく理解できないが、どうやら自然の側から見ればすべてが有機的なつながりを持っているので死は存在しない、ということであるらしい。(10) 山の下の広い場所。謝肉祭の仮装行列。太鼓を叩く人々の衣装はいかにも古くてみすぼらしく見える。ロココ風の服装をした老人が、姿の見えない子供たちに語りかけている。「世界を作るのは子供たちだ。神ではない」と言って、不遇な子供たちに救いの手を差し伸べようとするその老人は教育家ペスタロッチらしい。

(11) 岩の墓所。児童教育者である老人の正体を尋ねようとするタイラーが会うのは、ギリシャ語から聖書を訳している翻訳者と、医者であって哲学者でもあるトロクスラーだ。聖書翻訳者はエラスムスと呼ばれる。エラスムスとトロクスラーは、平和と正義の支配するユートピアについて語る。

場面の数で言えばここまでが前半ということになるが、戯曲のページ数からすれば3分の2に相当する。以上の筋書から推理できる通り、いずれも象徴的な暗示の方法によってはいるが、おおむねスイス史の流れに沿ってタイラーの「夜の旅」が組み立てられている。すべての法の起源となるのは自由でなければならないと説くトロクスラーが『ミーテン劇』の作者のメッセージを代弁する役割を与えられているらしい。

(12) フランス語の文句を口ずさみながら壁に赤い色の十字を描いている浮浪者。国際赤十字の創設者デュナンとおぼしいこの浮浪者を見て、「わがスイス国旗を裏返して描いている」とさげすむ口調で言うブーハーとドゥラーの2人。(13) 岩頭。大きな歯車。そこに集まった男女たちは、歯車式の軌条による登山鉄道で上って来た人たちであり、ブーハーとドゥラーは山岳観光開発の企業家と技術者であるらしい。人々がアルプスの景観を賛美し、美しい自然に恵まれた民であることの喜びを合唱で表現す

る。「ホイレカ！」とドゥラーが叫ぶ。「発見した！」を意味するこのギリシャ語の叫びは、それまで人々に害をなすだけの醜悪な山々と思われていたアルプスの美の発見を暗示する。それは観光事業の資本でもあるので、ブーハーとドゥラーは悪天候で景色が閉ざされるのを恐れて光を求める。

(14) タイラーが代用の光を求めてシャイベン犬を捜す。(15) 犬の魔力で作られた光に観光客たちがだまされる。この罪深い行為のためにタイラーはフィンツの命令で鎖につながれる。(16) 鎖から解かれたタイラーがトロクスラーに再会する。この哲学者は自国の民のために法律を起草している。タイラーは彼の弟子となって「あらゆる法に先立つ法」の書き取りをする。「国家よ、おのれをたえず克服せよ、さもなくばおのれ自身に屈伏することになるだろう」(17) 岩の洞穴で大統領が机に向かって何かを書きつけている。その娘のリュディアとタイラーに大統領は立法の仕事が山積していると語る。19世紀なかばにスイスが中央集権と連邦制度を折衷させる憲法を持つ連邦国家となったこと、銀行の設立、ゴットハルト峠の下をくぐる鉄道トンネルの掘削など、19世紀後半の経済発展時代がこの場面で暗示される。(18) その発展の犠牲となった人々を代表するかのようゴットハルト鉄道トンネル工事で悪い労働条件のもとで死んだ労働者たちがあらわれる。(19) 広い原。岩が演壇の役をつとめる。男たちが集まっていて、若い演説者が政治批判の熱弁をふるっている。「憲法が生まれたが、民はどこかに行ってしまった。自分たちの選んだ人々が自分たちから離れて行ってしまふ。…目に見えないシステムがわれわれを覆っている」古い直接民主主義から新しい間接民主主義に変わったスイスでの政治参加意識が問題とされる。この演説を聞きながら大統領とタイラーが通りすぎる。どうやらタイラーは大統領の秘書となっているらしい。(20) 3人のテルたちがあらわれて大統領に文書を渡す。これを大統領は新しい国家に有益なものとする。その文書はタイラーが書かされたものだ。が、伝説にすぎないと主張するタイラーは大統領の秘書の役目から罷免される。(21) タイラーを待ち受けていたのが第10場に登場した老人だ。これにリュディアが加わる。「川辺に立つ木を見よ。木は何から生まれたか？木が芽ぐん

だとき、種は朽ちた。だが、内にある生命が根と枝と樹冠と実を生んだ」この古い比喻が国家にもあてはまることを老人はタイラーに説く。(22)山から太鼓の音。そして稲妻。フィンツがタイラーに「夜の芝居」が終わった、「生きている人々の世界」に帰る時が来た、と告げる。リュディアがマントを脱ぎ捨てる。タイラーが探していた女性バルバラである。

### 3. 作者マイヤーと作品の意図

作者ヘルベルト・マイヤーは1928年に生まれた。1990年末にフリードリヒ・デュレンマット、1991年初めにマックス・フリッシュが相次いで死んだあと、スイスの文壇を支える中堅クラスの作者たちのひとりである。小説、戯曲、詩の3つの分野で多数の作品を発表している。チューリヒ劇場の文芸主任として演劇の現場に携わった経験の豊かさに加えて、スイスの歴史から材料をとってツヴィングリ、ブレーカー、デュナンなどを主人公とする戯曲を書いていたという実績からも、マイヤーに建国祝祭劇執筆の意思が打診されたのは順当なことと思われる。保守的なスイス・イデオロギーを支持するスイス作家協会を批判する人々は、1970年でオルテンで集会を開いたことから「オルテン・グループ」と呼ばれる。マイヤーはこのグループにくみしているが、現代スイスを戯画化したり辛辣な批判にさらすことを好まずスイス史から具体的な材料を得てスイス人であることの意義を歴史的に検証する立場と方法とをとりつけてきた。

彼の劇作品のうちでもっとも多くの上演回数を持つ『シュタウファー＝ベルン』は1974年から翌年にかけてチューリヒ劇場で演じられた。スイスの行政の中心地となったベルンの歴史を取り上げて、19世紀後半に都市ブルジョワジーが政治の主導権を確立するさまを劇化したものだった。実在の画家カール・シュタウファーが当時のブルジョワ階級を相手にして挫折するに至る悲劇を描いた。芸術を圧殺してしまう経済本位のブルジョワジーがスイスの現代社会の形成に大きな決定的な力を発揮したという歴史観は、『ミーテン劇』にも見て取ることができる。

政治や社会の問題について深く考えることもしないている、ごく平凡で

平均的なスイス人である主人公タイラーは、交通事故に遭ったことから「夜の旅」を経験する。そのタイラーは、フィンツという人物にいざなわれてスイスの歴史に擬せられた人物たちに次々に出会う。『エヴリマン』の趣向そのものだが、カルデロンやホーフマンスタールの古典的な作品を動機づけている「人間の罪」のテーマが『ミーテン劇』には欠けている。イプセンの『ペール・ギュント』やストリンドベリの『夢幻劇』とも異質である。作者が私に直接語ったところによれば、大きな枠組みはむしろゲーテの『ファウスト・第2部』から得たものであるという。しかし、それはあくまで枠組みにすぎなくて、全宇宙の認識を求めようとするファウスト博士の目的意識をタイラーはまったく持っていないし、案内役のフィンツにはメフィストフェレスのような悪魔性がない。タイラーが夢にも似た一連の場面を経験したあとで人間的に成長したのかどうか、将来の「開かれた、自由なスイス社会」に奉仕しようという意欲を得たかどうかを、タイラーが語らないうちに劇は終わる。

それでも、作者はトラスラーという人物を中心に据え、ペスタロッチとおぼしい老人に2度の出番を与えることによって観客あるいは読者へのメッセージが何であるかを気付かせる。イグナーツ・パウル・ヴィタール・トロクスラーとは、歴史、国家、法律に関する哲学的な著作を多く残した哲学者で、「アントロポゾフィー（人智学）」という言葉を生んだ人物である。ドイツの人智学者ルドルフ・シュタイナーの思想の先達をつとめた人物と呼んでよい。今では一般のスイス人から忘れられたも同然のこの人物の自然哲学に光を当てるところに作者マイヤーの作意がうかがえる。安定して動きを止めたものに価値を置かず、「絶えず揺れ動きながら前進するもの」の価値をトロクスラーは説いた。そして作者は劇中で彼にその言葉を語らせている。これに第21場での老人の「木と実の比喩」を重ね合わせれば作品の中核をなすメッセージが明らかになる。スイスの歴史が常に動いてやまない、過去から未来へと途切れなく有機的に結ばれて流れ続けるものであることを認識せよ、と『ミーテン劇』は告げている。

『ミーテン劇』は1991年7月20日にオーストリア人である演出家ハンス



・ホッファーとチューリヒ出身の若い作曲家ダニエル・シュニーダーとの協力によって初演された。現代の音響と照明の技術を駆使した斬新で大胆な総合演劇が、保守的な山岳農村地帯の牙城のひとつとされるシュヴィーツで華やかに演じられた。批評家たちを戸惑わせるほど前衛的な演出だった。

夜の冷え込みのはげしい土地で午後9時から2時間以上を要する上演である上に、台詞を語る役をつとめる職業俳優に300あまりの地元の素人たちが群衆の役を演じたために、最初の上演は深夜に終わった。メタファーに富む言葉が観客に伝わりにくかったことと、上演時間短縮のために、第2回目から若干の場面に修正がほどこされることになった。最後の場面ではフィンツが劇全体の趣旨をレジュメ化して語ることになった。まだ活字化されていないが、作者自身から新しい台詞を知らされたので、一種の自由詩形で台詞が書かれていることを示すことを兼ねて、第22場のフィンツの新しい言葉をここに紹介する。

フィンツ　　ぼくらは山中に登り、洞穴や岩室に入って、死者たちを訪ねた。

そしてさまざまなものたちを出現させた。埋もれたもの、沈んで消えていたもの、忘れられていたものたちの姿をだ、タイラー君。

そして今、死者たちは、その使命と夢を抱いて、昔のままに、岩の墓場の中に戻って行ったのだろうか？

タイラー君、そのものたちをあっさり帰らせる気かい？

生きているものたちの仲間になりたいのだよ？ でもね、君が彼らをまた埋もれさせてしまったら、そのものたちの望みは叶いようがないだろう？

——どうなるだろうか、君ばかりで、死者たち抜きであつたら、これから先は？

死者たちの復活。それはマイヤーにとって歴史を現代に呼び出す劇的な

思い付きにとどまるものではない。1973年に発表された短編集『解剖物語』の中に『死者たちの復活』という題の散文作品がある。生命を失ったもの、朽ち果てたものから、朽ち果てようのないものを汲み取ることが、この短い作品のテーマとされていた。死者たちを揺すって目をさまさせ復活させること。たとえ夢の中の幻影として描かれた想念を描いたにすぎなかったとしても、そこにあらわされたイメージが復活して、それこそ『ミーテン劇』の基本的な着想として生かされた、と言ってよい。マイヤーの1979年にチューリヒで初演された戯曲『ブレーカー』の最後に発せられる言葉は「われわれは墓という墓から現れ出る」というのであった。

その着想が、スイスの歴史をよみがえらせるドラマに発展した。その歴史は、山の中の魔性のものたちと同居する死者たちの幻影となって象徴的に、そして題名のもうひとつの意味である「神話劇」の名にふさわしいヴェールをかぶせられて描かれた。

#### 4. 現代に祝祭劇を書くことの困難さについて

大都市の劇場で日常的におこなわれる演劇とは異なる形態を持つ「祝祭劇」はスイスに独特の伝統のひとつとなっている。地域ごとの民主主義をはぐくんできたスイスでは、地域住民の連帯意識の向上に演劇が役立ってきた。建国700年を記念する催しでも、多くの土地で地域住民による素人劇が演じられたことにもそれが示されていた。土地の歴史、祖先の考えと行動を具体的な形で民衆に絵解きする手段として効果があるからである。謝肉祭の行事として演劇の形をとる土地が少なくなかったし、宗教改革の時代に地域住民の宗教意識を高めるのに演劇がとくに活用された、という背景もあった。19世紀のスイス作家ゴットフリート・ケラーの長編小説『緑のハインリヒ』にも地域住民による『テル劇』を描く章がある。

そのケラーが1859年に数千人が参加する「国民的な祝祭」を待望する気持ちをエッセイに書きあらわした。それはシラーの没後100年を記念しておこなわれた行事に参加したあとで綴られた文章だった。『ミーテンの山麓でのシラー祭』というタイトルを持つエッセイだった。ケラーの期待は

1886年に実現された。ゼンパハの合戦の500年を記念して祝祭劇が演じられた。スイス人の祖先たちが外敵に抵抗して雄々しくたたかっことを劇の形式で表現するものだった。これをきっかけにして祝祭劇のブームが起こって、そのブームはシラー没後100年目の1905年まで続いた。1891年のスイス建国600年の年にも建国記念祝祭劇が演じられた。

建国600年目の年は、スイスが古い連邦制度を近代的な国家に適合させようとする時期に当たっていて、進歩的でリベラルな陣営と保守的なカトリック地域との対立が解消したことが祝われた。しかも経済的な発展の目覚ましかった周辺の大國に互してスイス国内の精神的な統一を内外に強調する意図のもとの祝祭劇であったから、外からおびやかす勢力に対して協調してたたかっ祖先たちの歴史を演じてみせればよかった。1941年の建国650年の祝祭劇の場合もこれに似ていた。第二次世界大戦中のこととして、言語、文化、民族の区別を超えてスイス人が一体となって國家を形成する意思を確認するような内容の、つまりナショナリスティックな内容の劇であればよかった。ヨーロッパからスイスを切り離して、スイス独自の民主主義と平和と独立の理念を賛美する劇でありさえすれば建国祝祭劇となることができた。

だが、1991年にはそれらの前例を真似るわけにいかなかった。民主主義と連邦制度と永世中立の3つの柱をアイデンティティーのよりどころとしてスイスを美化してすませられるような状況ではなくなっていた。自己満足して正義の担い手であることを誇るようなドラマにはふさわしくない状況だった。第二次世界大戦中にスイスが生き延びるために、たとえばユダヤ人の亡命を制限したことを含めて、さまざまな妥協をしなければならなかったことがスイス國民の知るところとなっていた。EC（欧州共同体）の市場統合が目前に迫っているのにまだ態度を決めかねて、不安と優柔不断に悩むスイスの現実があった。

スイスの過去を美化し賛美し肯定するだけの祝祭劇を書いてすませることは、祝祭劇の依頼を受けた作家の選ぶべき態度ではなかった。およそ祝祭劇を書きにくい状況であったのだ。

マイヤーはこの困難に挑戦した。スイスの過去を呼び出して、祖先からのメッセージを現代スイス人に伝えようとする基本理念に関して、マイヤーも例外ではありえなかった。しかし、マイヤーは国家イデオロギーの宣伝者になるつもりはなかったし、現代の劇作家として特定の一方を肯定するよりは、複数の立場を肯定してバランスをとる考え方をよとした。「スイスにかかわることはヨーロッパ全体にかかわることである」とトロクスターが1815年に書いていた。その発想を継承するマイヤーは、国家イデオロギーを旗印にしない祝祭劇を書こうとした。

スイスの山にひそむ自然の魔力と死者たちの幻影を通じて、先人たちの描いた夢とユートピアに言い含められたメッセージをよみがえらせることに成功したかどうか？ 現代の平均的スイス人たちにスイスの過去を考えさせて、現在のスイスの置かれた状況を克服する知恵と勇気を与えることに成功したかどうか？ これらの問いかけに作品自身は断定的な答を語らない。芸術は政治ではないからだ。「芸術であれば、政治的な作用もはたすことができる」と作者は語っている。ただし、この『ミーテン劇』は神話化された歴史を解体して土俗的な神話に還元するという点において政治を集団心理の根源に連れ戻す芸術的な試みであり、イデオロギーの美化を拒む現代的な祝祭劇となったことは確かである。

#### 文献と注記：

- (1) 『ミーテン劇』の粗筋は下の刊本による。

Herbert Meier: MYTHENSPIEL, ein großes Landschaftstheater mit Musik. München [Piper] 1991.

- (2) 作者が私に自書してくれた改変テキストによる。

Vinz. Wir stiegen hinein ins Gebirge und fuhren in die Höhlen und Kammern, zu den Türmen hinauf.

Und brachten Erscheinungen zutage, vergrabne Figuren,  
Abgesungenes, Vergessenes, Teiler.

Und jetzt deine Toten, mit ihren Botschaften und Träumen?  
wiedergegangen, in ihre Felsgraben gegangen.

Und du, Teiler, lasst sie gehen?

Unter den Lebenden mochten sie sein. Wie aber können sie es,  
wenn du sie wieder vergrabst?

—Und wohin geht', mit dir, Teiler, ohne sie, deine Toten?

- (3) Herbert Meier: Anatomische Geschichten. Zürich [Benziger] 1973 S. 103
- (4) Herbert Meier: Bräker. Schauspielhaus Text 1. Zürich 1978, ohne Seitenangabe.
- (5) Herbert Meier: Zum "MYTHENSPIEL" Aus der anlässlich der Aufführung herausgegebenen Mappe. Schwyz 1991.
- (6) Ignaz Paul Vital Troxler: Über die Schweiz. 1815. Aus der obengenannten Mappe.
- (7) Vgl. Klaus Pezold u. a.: Geschichte der deutschsprachigen Schweizer Literatur im 20. Jahrhundert. Berlin [Volk und Wissen] 1991, S. 49f./Urs Allematt: Auf der Suche nach der verlorenen Heimat. 'Neue Zürcher Zeitung', 31. 7. 1991.